魅力その2

わたる吹き緑の風

いきいきと緑かがやく一面の茶畑は、東彼杵町を代表する風景です。新芽を揺らす薫風を胸いっぱいに吸い込んで、大きく背伸び。

山肌を刻む棚田、みかん畑、山里を囲む深い森……うつろう季節ごとに色調を変えながら、見る人を優しく包み込みます。

どこか懐かしい農村風景は、日々の慌ただしさを忘れさせてくれるのです。

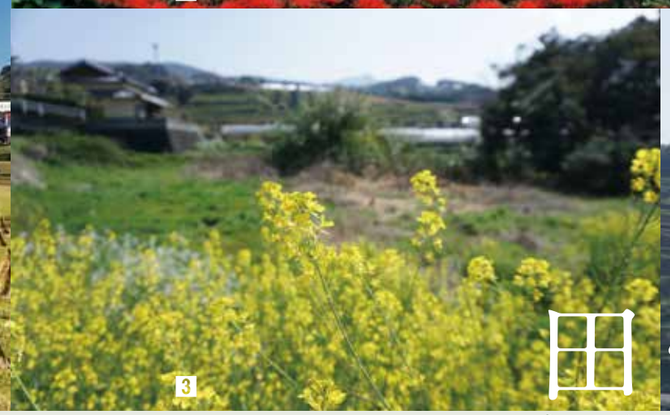
1 坂本地区の斜面地の茶畑。新茶の季節、扇状に広がる若緑は圧巻です。

2 日当たりの良い高台、赤木地区の集団茶園。お茶の町・東彼杵らしい場所。

3 春の季節だけの贅沢な風景。緑の中に、桜のピンク色が優しく映えます。

4 赤木茶園からは大村湾が。空と海と茶畑で、オススメ撮影ポイントです。

5 お茶の新芽は柔らかでみずみずしい。新茶として摘まれるのを待っています。



懐かしの田園風景

1 坂本地区の棚田の稲刈り風景。秋風に真っ赤なヒガンバナが揺れます。

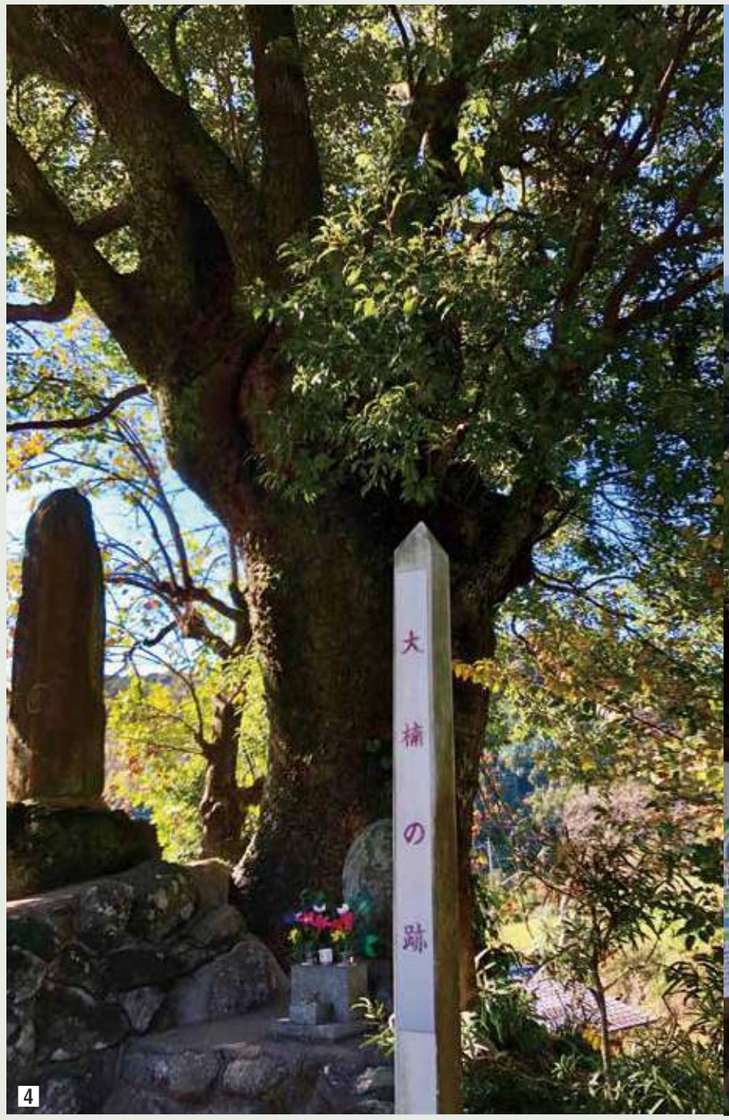
2 丘の海側斜面に作られた里地区の棚田。変化に富んだ形が楽しい。

3 国道から旧千綿中学校へと坂を登れば、畑の傍らに菜の花が揺れています。

4 米どころ・木場地区。休日には「木場のむすび」で美味しいおにぎりを買って。

5 彼杵川下流域には広い平野が。遠くに見える建物は町の中心部・彼杵宿。

たくましき樹木の力



1 グリーンロードの展望広場からの眺め。工事中の新幹線と遠くに長崎自動車道。

2 紅葉の季節。深い秋色に染まった千綿渓谷に落ち葉を踏みしめる音が響きます。

3 トトロがひょっこりと姿を現しそうな緑のトンネル。千綿渓谷への入口です。

4 5 さまざまな伝説をもつ大楠の木は、二代目になって町を見守りつづけます。

コラム

大楠伝説

旧長崎街道沿い、佐賀県嬉野市との境「俵坂峠」にほど近いところに、天高く生い茂るクスノキがありました。目を引くその大きさに「あの木」「その木」と呼び親しまれ、地名としての「そのき（彼杵）」につながったともいわれます。

元禄四年（一六九一）にオランダ商館付の医師ケンペルが、文政九年（一八二六）にはシーボルトが、江戸参府の道中に、驚きをもって大きなクスノキを見上げました。ケンペルの残した絵はヨーロッパでも紹介され、シーボルトも川原慶賀にその姿を描かせています。シーボルトの記録によると、周囲一六・八八メートル、直径五・三七メートル、中は空洞になっていて、畳が八枚敷けるほどだったそうです。

残念ながら、巨木は明治期に樟脳の原料として切り倒され、現在は旧株から育った二世が地域を見守っています。

魅力その3

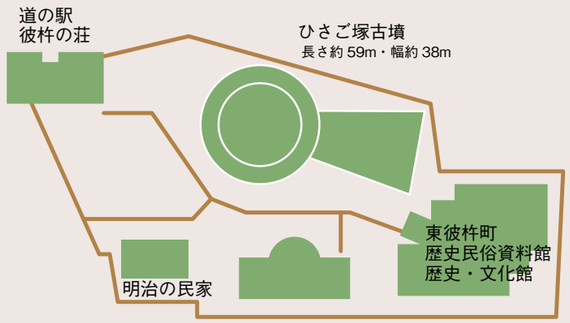
しえの憶を隠る

はるか昔から人々が集落を作って暮らしていた豊穣の土地、東彼杵。人や物品の往来が活発になると、やがて街道が整い、宿場町ができました。

文化のクロスロード・東彼杵の歴史を知るほどに、眼に映る町並みは深みを増して新たな魅力をもっと探したくなるにちがいありません。

いにしえ迪

悠久の時の彼方へ



1 全長 58.8 メートルの前方後円墳「ひさご塚」。

2 東彼杵町について深く知り、学ぶことができる歴史公園「彼杵の荘」。

コラム

東彼杵町歴史民俗資料館

国道からも、ひときわ目を引く「ひさご塚古墳」。その傍らに、東彼杵町の歴史をわかりやすく紹介してくれる歴史民俗資料館があります。一万年以上前の旧石器時代から縄文弥生時代、江戸時代までの資料を展示する歴史館と、長崎街道の宿場町としての繁栄を示す郷土の文化財を展示する文化館に分かれ、訪れる人々を壮大な歴史ロマンへと誘います。

古墳や資料館のある公園内には、明治期の民家が移築され、当時の様子を伝えます。また、道の駅「彼杵の荘」物産館も併設され、幅広く楽しむことができます。

●東彼杵町歴史民俗資料館

観覧料 ……大人200円
小・中学生100円

開館時間 … 9：00～17：00
（入館は4：30まで）

休館日 …… 毎週火曜日・年末年始
（12月28日～1月5日）

街道の名残を訪ねて

1 かつて栄えた彼杵宿から彼杵川を越えて、千綿宿へと街道は続くのです。

2 元禄波止のほど近く、長崎街道と平戸街道の分岐点。行こか戻ろか、思案橋。

3 4 歴史公園内に移築された古い民家。内部も当時の佇まいを残しています。

5 千綿川の手前が千綿宿。変化に富んだ海岸線をうねるように列車が走ります。

6 千綿宿の町並み。彼杵宿と大村市にある松原宿の間に位置する静かな集落です。

7 大村藩と佐賀藩の境、俵坂峠の駕籠立場跡。大名行列がひと休みしました。

コラム

土肥家（どいけ）と大浦お慶

千綿宿の街道筋に建つ、白壁に格子戸の趣あるつくりの旧土肥家。古くは屋号を「伊勢屋」といい、宿場町が商いで賑わっていた江戸時代に、ここで廻船業を営んでいました。幕末には、長崎の豪商・大浦慶との取引で、お茶や農産物を出荷していたといいます。

日本茶の貿易で巨万の富を築いた「お慶さん」は、坂本龍馬ら幕末志士を支援し、陰ながら明治維新を支えた女性でもありました。

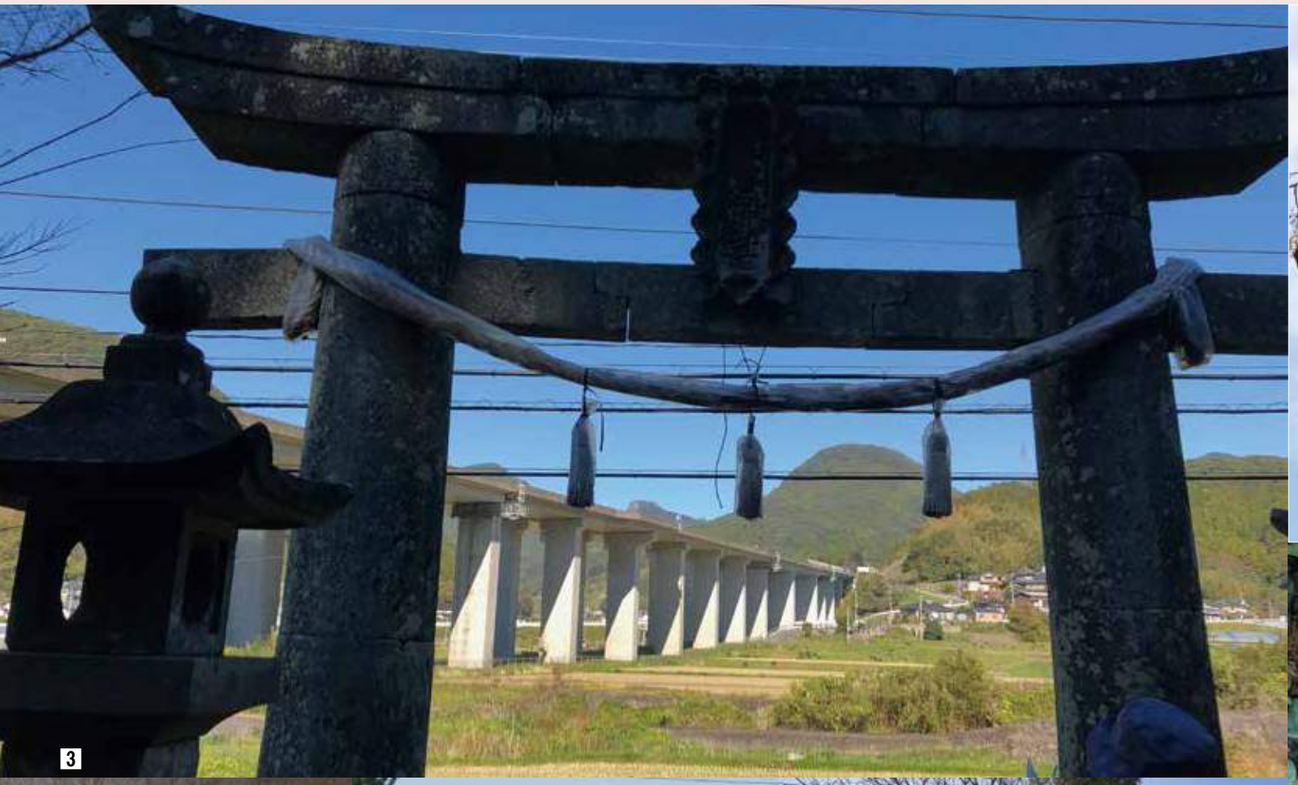
建物は明治末期に建てられたもので、近年には屋根の葺き替え改修がおこなわれたものの、お茶の商談時に使われていたという座敷や庭園が残されています。現在は茶業を営む岡田家に引き継がれ、静かな街並みの中にあって、かつての繁栄を伝えてくれているのです。

コラム

長崎街道

江戸時代に整備された、長崎から北九州小倉までの五十七里（二百二十四キロメートル）のルートを長崎街道といいます。鎖国の時代、唯一開かれていた長崎へと通じる街道は、往来する人や物でいつも賑わっていました。なかでも彼杵宿は、大村藩と佐賀藩との藩境であるとともに、平戸街道、時津方面に向かう海路の分岐点として栄えました。

『大村郷村記』には「彼杵本町長さ一町三十七間、商家軒端を列ねて相対す。此の堀川より東を本町といい、西を金谷町といい、両町にて家数二百八十四軒あり」と記されています。



信仰と祈り

1 彼杵宿入口の本町万部塔。キリスト教禁教時代に仏教信仰の証として。

2 里地区の江串三郎入道塚。南北朝時代、倒幕の兵を挙げて戦いました。

3 鳥居の向こう、遠くに霞む虚空蔵山には古くから信仰されている虚空蔵菩薩が。

4 佐世保方面に向かう平戸街道、漁港のある音琴地区の海岸の丘の上の弁財天。

5 キリスト教信仰を貫き、殉教した二十六聖人。ここから長崎に向けて船出しました。

6 うっすらと花十字が残るキリシタン墓碑は元和７年（1621）のものだそうです。